

らそれを見抜かれ、鏡そのものが曇ってしまうのであるし、又将来に不安があっても鏡に凶として曇りが生じるはずである。九句目「自ら疑ふらくは鏡に翳を浮かぶるか」と一寸道真が不安になるのは、「鏡に翳を浮かぶ」のは、自分の将来に凶とする不安要因がひそんでいることを鏡が予知しているのではないか、又自分に忌む所があるのを鏡により見抜かれているからではないかと考えるからである。故に一〇句目で鏡の表面を磨き、一一句目でそれにより「光が更に信まことか」になり、一二句で「知りぬ、其の眞を失はざることを」と安堵する内容になっている。このような鏡に対する認識が基底にあることを踏まえてみると、「485 秋夜」の「月光 鏡に似て罪を明らかにすること無し」の表現内容が理解できる。つまり「本当の鏡なら人に罪がなければ 忌む所がなければ明らかに顔を写し、罪科があれば鏡面は曇るというのにこんなにも明らかに鏡面さながらに月光が照り輝いている（私には何一つやましいところがないことを証してくれているはずな）のに、私の無実を何一つ証してくれない」という納得ができない、不満の心情が明らかになるのである。

「六句目「風氣如刀不破愁」の表現について」

この句については、小島憲之氏が既に指摘されているように（注四）「風氣」が「刀のごとし」という表現は次の『白氏文集』が踏まえられていると考えられる。

2542 晩寒

急景流如箭

急景 流ること箭のごとく